



HOKKAIDO UNIVERSITY

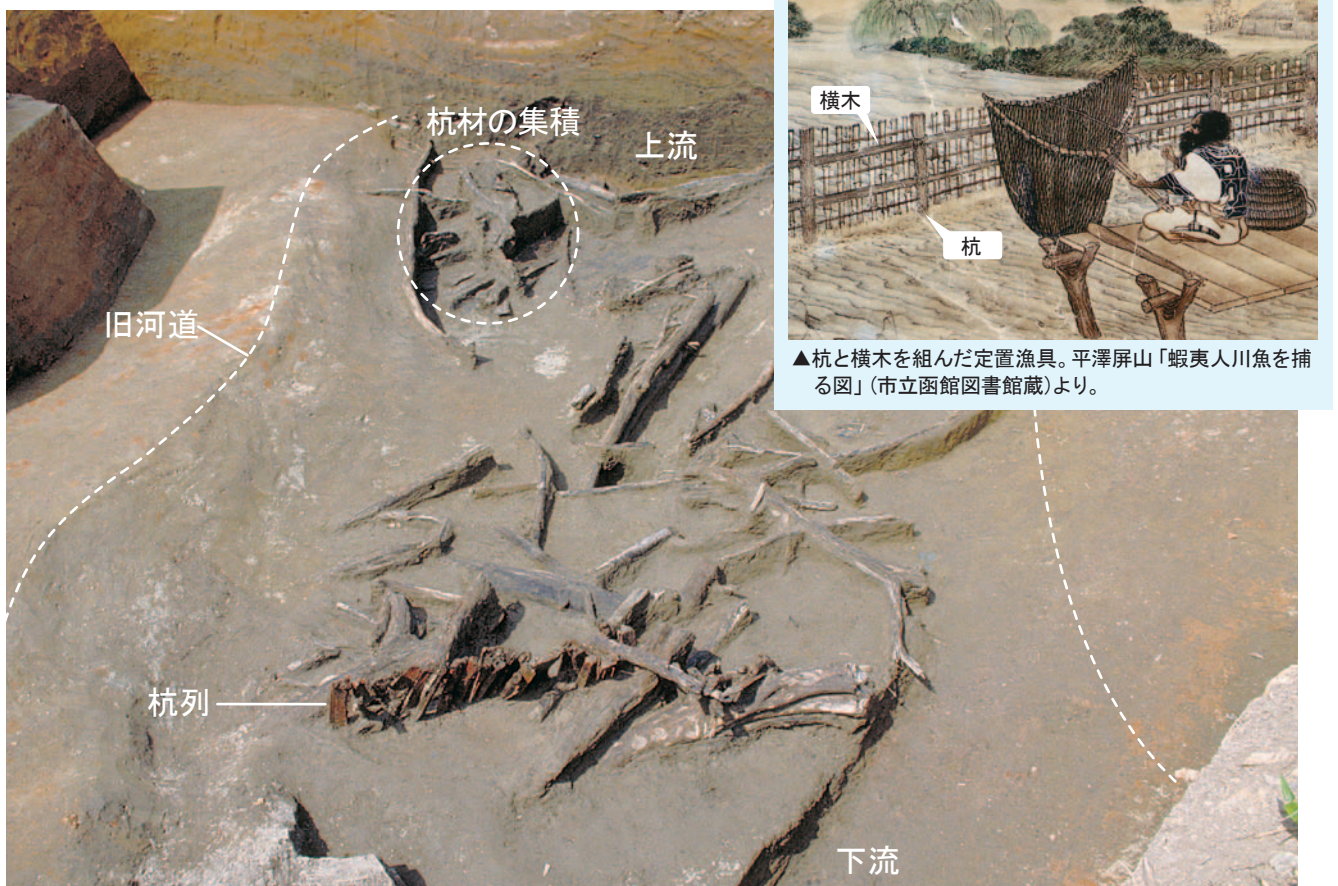
Title	北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター 第16号
Description	特集 定置漁具
Issue Date	2013-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53537
Type	journal
File Information	NL16.pdf



埋蔵文化財調査室ニュースレター

特集 定置漁具

北大構内を流れるサクシュコトニ川、及びセロンベツ川は、市街化により改変され、現在、埋没・枯渇していますが、かつてはその水源である湧水とともに、産卵床があったとみられサケが遡上していました。人類のサケ利用の歴史は古く、ヨーロッパでは後期旧石器時代後半まで遡り、日本列島でも約1万5千年前の東京都前田耕地遺跡からサケ科の骨が発見されています。サケの捕獲方法は多様ですが、定置漁具は、川などの一定の場所に杭列を設置することにより、魚の遡上を妨げ、あるいは誘導して捕獲するための施設です。杭列は、杭と横木を組み、柵状の施設を作りますが、これには様々な樹木が加工して用いられています。そのため、定置漁具は往時のサケ漁を知る手掛かりであるとともに、樹木を利用した人々と環境との関わり(植生史)の一端を明らかにする貴重な資料でもあります。本特集では、北大構内遺跡から発見された定置漁具について、紹介していきます。

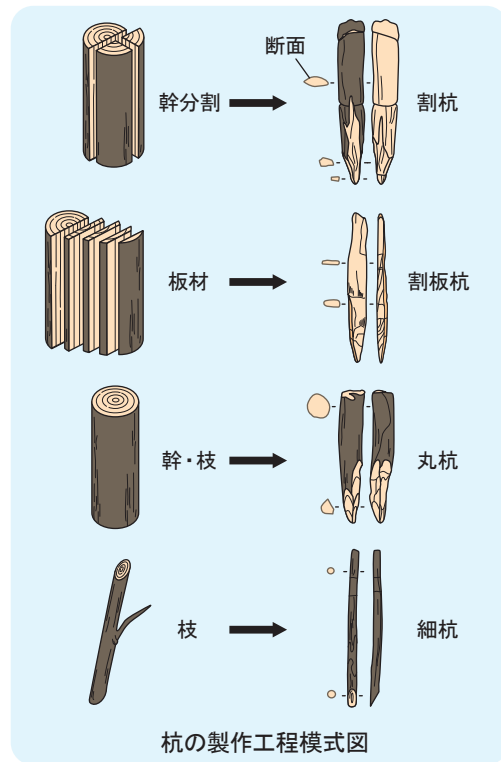


▲杭と横木を組んだ定置漁具。平澤屏山「蝦夷人川魚を捕る図」(市立函館図書館蔵)より。

▲北大構内のK39遺跡エルムトンネル地点で検出された杭列(写真:札幌市埋蔵文化財センター蔵)。

川幅、5m~6mのサクシュコトニ川に1列の杭列が横断して設置されています。時期は、擦文文化(約8世紀~12世紀)と考えられています。杭には、主にヤナギ属の割杭、丸杭が用いられ、河床から約40cm深く灰色の粘土層に打ち込まれています。杭列の上流には、その設置の際に準備されたとみられる杭材の集積も発見されています。平澤屏山の絵には、柵の手前で遡上を阻まれた魚をタモ網で捕獲している様子が描かれています(右上)。

定置漁具が出土した地点



北大構内K39遺跡から検出された定置漁具

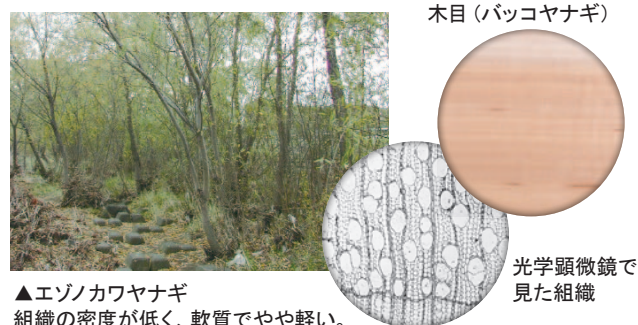
No.	地点名	配列の仕方	杭・横木の加工方法	杭・横木の樹種	川の形状	時期	文献
1	エルムトンネル地点	川中央に割杭、丸杭を密に打ち込み、部分的に横木を組む。杭列約2.3mで小規模	割杭一丸木を分割し、先端削り尖る。樹皮付き 丸杭一先端削り尖る	割杭一主にヤナギ属 丸杭一主にヤナギ属 横木一ヤナギ属等	川幅5～6m 水深推定約30cm 中央部深み	擦文文化	札幌市教育委員会『K39 遺跡 第6次調査』
2	恵迪寮地点	左岸一割板杭と横木を組む 中央一割板杭疎ら/細杭 右岸一横木と細杭を組む？ 全長約12m、開口部あり？	割板杭一板材先端削り尖る 細杭一枝加工 横木一主に板材を使用 丸杭一先端削り尖る	割板杭一トネリコ属 細杭一主にヤナギ属 横木一主にトネリコ属 丸杭一ヤナギ属等	川幅約12m 水深不詳 左岸深み/右岸浅瀬	擦文文化？ アイヌ文化？	北大埋蔵文化財調査室『サクシュコトニ川遺跡』
3	付属図書館本館北東地点	杭4本検出のみで不詳	割板杭？一先端削り尖る	割板杭？一トネリコ属	不明	アイヌ文化（16世紀）	北大埋蔵文化財調査室『北大構内の遺跡 13』

北大構内遺跡から検出された杭列は、配列の仕方、樹種の選択、杭の加工方法などに差異がみられます。杭列を川に設置するために割杭（幹を分割し、先端を加工したもの）、割板杭（板材の先端を加工したもの）、丸杭（幹・枝の先端を加工したもの）、細杭（枝を加工したもの）が用いられます。恵迪寮地点では、割板杭、及び横木には、トネリコ属、細杭にはヤナギ属が主に用いられています。付属図書館本館北東地点でも割板杭(?)には、トネリコ属のものが使用されています。トネリコ属、ヤナギ属は湿地に多く生える樹種で、杭列を作る際にはサクシュコトニ川周辺の植生が利用されたものとみられます。トネリコ属の代表的な樹種であるヤチダモは、硬質で加工性が良く、現代でも運動用具（バットなど）に使われています。割板杭には、強度で割材に適当なトネリコ属が、一方、細杭には、軟質で重量が軽めのヤナギ属が選択的に使用される傾向がみられます。ただし、エルムトンネル地点では、割杭・丸杭ともにヤナギ属のものを使用しており、こうした樹種の選択が時期的なものなのか、あるいは当時の植生を反映したものなのか、今後、さらに検討が必要です。

トネリコ属(代表的な樹種ヤチダモ、アオダモ)



ヤナギ属(代表的な樹種バッコヤナギ、エゾノカワヤナギ)



■ K39遺跡 恵迪寮地点の定置漁具

杭列は、セロンベツ川の氾濫、ないし洪水により倒壊していますが、エルムトンネル地点のものとは比べ全長が長いのが特徴です。時期は、擦文文化(約8世紀～12世紀)、ないしアイヌ文化(約13世紀～19世紀)と考えられています。下流側に割板杭列、また上流側に配置が不規則な丸杭が検出されています。下流側の割板杭列は、中央の杭列を設置する以前に放棄されたものでしょう。上流側の丸杭は、中央の杭列と組み合わせて使用されていたかは不詳です。いずれにしても、この地点が繰り返し利用されたことを示しています。恵迪寮地点で検出されたセロンベツ川の幅は、約12m、左岸がやや深く、右岸は浅瀬で、サケは左岸寄りを遡上していったものとみられます。杭列は、左岸寄りでは強固に構築しているのに対し、右岸寄りでは簡略な作りで、川の形状(水量、深さ、流れ)に合わせて構築したものとみられます。



■ 現代に受け継がれる定置漁具



▲新潟県村上市三面川下流に設置された定置漁具。川を横断する柵を設け、左右両岸に設置した鉄柵(ウケ)の中にサケを誘導し、すくい網で捕獲します。



▲ユーコン、クルクシュ(Klukshu)川に設置された先住民の定置漁具。遡上するサケを誘導し、捕獲する仕組みです。

定置漁具を用いたサケ・マス漁は、北海道だけでなく東北地方などサケ・マスの遡上する地域では、形態に差異はありますが、様々な所で用いられてきました。現代にも、こうした知識は受け継がれています。新潟県村上市三面川で行われている「一括採捕」と呼称されるサケ漁も定置漁具を用いたものです。また、日本列島のみならず、サケ・マスが遡上する北洋沿岸では、広く用いられてきました。形・素材は、地域により異なりますが、機能は魚の遡上を止めて、あるいは誘導して捕獲するという点で共通しています。定置漁具の多様性は、各地域における川の形状(水量、深さ、流れ)、環境(定置漁具を作成するために必要な樹木を育む植生)、そしてサケ・マスの習性に合わせて発展させてきたことによると考えられます。

■【お知らせ】 第6回北海道大学埋蔵文化財調査室調査成果報告会を開催します

北海道大学埋蔵文化財調査室で今年度実施した調査・研究の成果について、一般の多くの方々に公開する成果報告会を開催いたします。第Ⅱ部では、北大構内で多くの遺跡が発見されている擦文文化について、東北地方との関係や「北海道式古墳」のことも含め、ご講演をいただきます。当日、会場では、休憩時間中にご見学いただけるよう、今年度の発掘調査の出土資料を展示する予定です。

開催について

日 時：2013(平成25年)年2月11日(月・祝日) 13時～
会 場：北海道大学学術交流会館第一会議室
(札幌市北区北8条西5丁目、大学正門から入って左手すぐ)
参加費：無料
参加申し込み：不要(直接、会場にお越し下さい)

プログラム

13:00 … 開催あいさつ

【第1部】

13:05 … 坂口 隆(北海道大学埋蔵文化財調査室)
「埋蔵文化財調査室による2012年度調査の概要」
13:25 … 守屋 豊人(北海道大学埋蔵文化財調査室)
「薬学部ファーマサイエンス研究棟地点調査の成果」
13:55 … 高倉 純(北海道大学埋蔵文化財調査室)
「黒曜石はどこから運ばれてきたのか?—北大構内遺跡における縄文晩期～続縄文の黒曜石製石器原産地分析」
14:25 … 休憩
14:45 … 越田 賢一郎(札幌国際大学教授)
「擦文文化とオホーツク文化—アイヌ文化形成への前段階として」
15:25 … 質疑応答
15:45 … 終了

当日は
直接会場まで
お越し下さい!!



編集後記

本特集の作成につきまして、以下の諸機関・先生から多くのご教示をいただくとともに、資料掲載につきまして御高配をいただきました(敬称略)。御礼申し上げます(坂口)。有賀望(札幌市豊平川さけ科学館)、藤井誠二(札幌市埋蔵文化財センター)、渡邊陽子(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)、寒地土木研究所水環境保全チーム

北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター 第16号
平成25(2013)年2月4日発行

発行：北海道大学埋蔵文化財調査室

〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話：011-706-2671 FAX：011-706-2094

e-mail：jun-ta@let.hokudai.ac.jp

URL：http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~q16697/maibun/index.html